読者の声

本当の豊かさについての思い

柘植 純一(北広島市)

長女が3歳になった1995年8月、自然に恵まれた環境で育てたいという思いから、北広島市大曲に家を借りて引っ越した。住宅地に隣接した市街化調整区域にあり、「となりのトトロ」に出てくる草壁家の家を髣髴させるロケーションである。通勤には1時間ほどを要するが、木立に囲まれた敷地の中は別世界で、それまでの市街地での生活から一転して別荘暮らしのよう毎日が始まった。

裏庭には小さいながらも池がありゲンゴロウの仲間などが泳ぎまわり、岸辺の草にはオオルリボシヤンマの抜け殻がついていた。この辺りは地下水位が高いのか、1年を通して池の水が枯れることはなくほぼ水位が一定していた。また徒歩数分のところには雑木林があり、そこを抜けるとしばらく緩い下りの笹原が続き、その奥では疎林の中を小川が蛇行するという、絵に描いたような里山の風景が広がっていた(写真)。

翌年4月中旬の夜、池の辺りから聞きなれない鳥のような虫のような可憐な声が聞こえてきた。初めて聞くエゾアカガエルの声だった。以来20年間エゾアカガエルは池の氷が解けると同時に私たちに春の訪れを知らせてくれる。4月末まで毎晩鳴き続け、日に日に池の卵塊が増えていった。エゾサンショウウオの卵も見られた。5月に入ると水面はオタマジャクシによって埋め尽くされた。



疎林の中を蛇行する小川(2005年5月)

野鳥の多さにも驚かされた。庭に餌台を設置してヒマワリの種を置くとシジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ヒガラ、シメ、カワラヒワが訪れた。まれにミソサザイ、メジロ、キクイタダキが姿を見せることもあった。春になるとキビタキ、クロツグミ、カッコウ、アカハラ、ヤブサメ、アオバトの声で目覚め、夜にはヨタカ、オオジシギ、トラツグミの声に1日の疲れを忘れた。

上述の小川周辺の春も素晴らしかった。ミズバショウ、フクジュソウ、エゾエンゴサク、ニリンンソウ、ヒトリシズカなどが咲き乱れ、もちろん山菜採りも楽しむことができた。6月のある日、笹原を散策しているとオオジシギと鉢合わせになった。子育で中のようで逃げることなく私に向かって激しく鳴き続けており、罪深い気持ちになった私はそっとその場を離れ、この時期には笹原に近づくことを自重した。

このような環境が 2015 年に一変した。5 月初めに山菜採りに行くために林を抜けると、笹原から先は草 1 本生えていない荒地になっており、呆然と立ち尽くすしかなかった。秋には見渡す限りソーラーパネルが並んでいた(写真)。北広島大曲太陽光発電所(56,590 m²:2,388 kW)である。脱原発、再生可能エネルギーの普及は当然であるが、原野を切り開いての太陽光発電所の建設には大きな疑問を感じる。国が電力会社に再生可能エネルギー電気の買取を義務づけた固定価格買取制度(FIT)により、太陽光発電そのものが金融商品と



見渡す限りのソーラーパネル基地となった笹原と疎 林(2015年11月)

して投資の対象になっていること、昨年末の段階で、FITで認定されている太陽光発電の設備容量は既設の3倍に達していること(「太陽光発電バブルで日本の里山が変わる」週刊金曜日、2016年10月18日、1110号)から、今後身近な自然が無秩序に破壊されていくことが懸念される。1980年代末のリゾート開発に似た匂いを感じるのは私だけだろうか。

昨年以来自宅でオオジシギやヨタカの声を聞く ことはできなくなった。